

経済観測

新入生、新社会人が期待と不安に満ちた表情で街を歩いている。

この時期になると、私は約40年も前の、駅前桜並木の花吹雪の中の大学の入学式を思い出すが、卒業式、入学式などこれまでの自分史を思い出すのは、私だけではないだろう。

この40年間、日本の産業界や金融界は大きく変貌（へんぼう）した。輸出産業は国際展開を加速させ、金融業

入学式と桜

は高成長や海外進出のあと、停滞と撤退を経験した。これに比べると、日本の大学の研究教育体制の変化は微々たるものだ。

現在の日本の大学に求められるのは「国際化」である。自然科学や社会科学の研究の最先端では、英語環境のサイバー空間で研究成果が一瞬のうちに世界中に発信される。発信基地の一つにならなければならない相手になれない。教育では、世界で活躍できる人材の輩出が大切だ。英語能力が高いたけではなく、異

東京大教授

伊藤 隆敏

文化のなかで仕事ができる、外国人相手に交渉ができる人材に、日本の将来を託したい。大学の国際化のためには、英語だけで卒業できる学位コースを設



置して日本人と外国人が机を並べて学習する環境をつくったり、ダブル・ディグリー制度を導入して、二つの国の大学で同時に学位を取れるようにするとい

った取り組みが大切だ。東京大学の公共政策大学院と大学院経済学研究科でも、このような国際化をすすめるうとしている。

国際化の障害のひとつが、外国の大学との学期のずれである。欧米の大学の新学期は9月、卒業式は5月か6月である。世界の大学との交流を深めるためには、大学の9月入学制を真剣に考える必要がある。花吹雪の大学入学式が見られなくなるのは残念だが、国際化のなかで生き残るためには英断が必要だ。

新聞掲載はしないが、ホームページ掲載にあわせて、注釈をつける。

注。

(1) しかし、そもそも桜の満開が入学式に時期にあたるのは東京から鹿児島までのこと。東北、北海道、沖縄では時期がずれている。北海道では桜の満開はゴールデンウィークの頃。北海道に住んでいたころは、全国ニュースで桜と入学式の話が出るたびに、外国にいるような気分になったことも思い出す。

(2) 大学の入学時期を9月にするとしても、高校の学習年限を（学習進度により）2年半と、3年半の選択性にするだけで、小学校から高校まではいままでどおりでよい。中高一貫教育を一般的にすることで、5年半、6年半の選択性というのもよい。

(3) 大学の入学時期について4月と9月の選択性にすればよい、という意見もあるが、履修前提をつける積み上げ形の授業をとる学部や専攻の場合には、年2回の入学生を迎えることはカリキュラムを組む上で、不都合となる。

9月入学の場合、卒業は6月になる。会社の新入社員採用時期は、9月として、就職活動と内定は、卒業式までは禁止。6月から9月までを就職活動、内定の時期をすることで、大学生は最後までしっかり勉強してもらいたい。